

豊蔵志野

挑戦から創造へ



『古志野』
志野山景色四方向付 安土桃山時代
可児郷土歴史館にて展示



『豊蔵志野』
志野茶碗 銘「随縁」 昭和36年 荒川豊蔵作
展示期間 7月4日（金）～8月31日（日）

今年、人間国宝荒川豊蔵は生誕120周年を迎えます。荒川豊蔵資料館では、これを記念して、「豊蔵志野 挑戦から創造へ」と題した企画展を開催します。豊蔵の原点となる「志野」に焦点を当てた展示です。

源流

豊蔵は、明治27年（1894）に多治見市で誕生しました。多治見市は古くから窯業の生産地として知られています。豊蔵の生家も農業の傍ら、陶石の粉砕を副業としていました。窯業に携わる親戚も多く、やきものとは密接な環境で生まれ育ちます。

昭和5年（1930）4月11日、豊蔵は「日本の陶磁史を覆す大発見」といわれる古志野の筒絵陶片を発見します。その2日前、北大路魯山人と名古屋で古志野の焼かれた場所について議論していた時、この古志野は瀬戸以外で焼かれたものだと感じたのでした。魯山人と意見が合わず、寝付けないで考えていると、昔叔父に案内された美濃の古窯跡のことを思い出します。そして、久々利大萱へ赴き、陶片を発見しました。まさに、豊蔵のルーツこそが、志野陶片の発見を導いたといえる出来事でした。

そして豊蔵は、古志野との劇的な出会いに導かれ、その再現に挑み生涯の仕事とするため陶芸の道に足を踏み入れます。

「志野」再現への挑戦

「志野」は、約400年前の16世紀末頃の安土桃山時代に東美濃地方で生まれたやきものです。信長や秀吉が茶の湯を政治に利用したことにより、陶器が政治に色濃く影響を与えた時期でした。茶の湯の流行とともに、千利休や古田織部といった茶頭の働きにより、桃山陶などの国産品が好まれ、陶器の色や形はどんどん変化していきました。そのため、日本の陶磁史上最も華やいた時期といわれています。しかし、茶頭の交代や流行の変化により、わずか20年ほどで「志野」はその姿を消してしまいます。

その後、制作技術が途絶えていた「志野」を現代に蘇らせたのが、豊蔵です。豊蔵は残された陶片や古陶磁器を収集し、制作の手本とし、「志野」再現に挑戦しました。

今回の展示では、手本とした古陶磁器

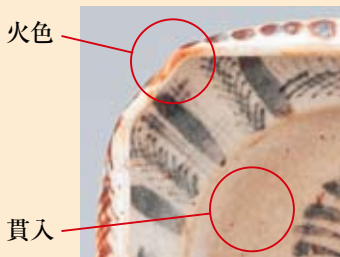


久々利大萱でロクロを引く豊蔵

「志野」とは

長石という鉱物を主体とするほぼ透明な釉薬（長石釉）を施し、白い土の地色を浮き立たせた、日本で最初の白い施釉陶器です。釉の下に鉄絵の具を筆で描くのも、日本で初めての技法です。安土桃山時代、日本に入ってきた中国の染付磁器をまねたものとも言われます。「志野」の名前の由来には諸説あり判然としませんが、江戸時代中期には一般化していたようです。

白い肌に入った貫入（細かいひび）と、胎土に含まれた鉄分が釉薬の薄い部分から赤く発色する火色、大らかで繊細なタッチで描かれた文様などが鑑賞のポイントです。一点物としての茶道具から懐石食器まで、幅広い器種が作られました。制作技法だけでなく、作られた器の形や文様が多様であることも特徴です。



「豊蔵志野」の創造

豊蔵は、便利さや効率性ではなく、安土桃山時代の古志野の制作工程を追及することが、「志野」再現への道筋であるべきと考えていたようです。そのため、陶片を発見した古窯の傍らに、居宅や仕事場を構え、自然に寄り添うライフスタイルを生涯貫きました。

そして、「豊蔵志野」と称される独自の造形美と色彩美を誇る作品を創造しました。今回の展示では、豊蔵作品の鑑賞ポイントと共に、その魅力を紹介します。「豊蔵志野」を、あなたの目と心で感じてみませんか。

荒川豊蔵生誕120周年記念 「豊蔵志野 挑戦から創造へ」

会期 7月4日（金）～10月13日（祝）
※金・土・日曜日および祝日のみ開館
開館時間 午前10時から午後4時
会場 荒川豊蔵資料館
久々利柿下入会352
☎ 041461

問合先 可児郷土歴史館
☎ 040211